

# KOIZUMI Takumi

## 小泉 巧

富山大学 学術研究部 芸術文化学系 助教

### 1. はじめに

富山大学大学院修了後から地元京都に戻り、ひっそりと制作活動に勤んでおりましたが、ご縁をいただきまして再び富山に帰ってくることになりました。豊かな自然の中での制作・研究活動が作品にどのような影響を与え、作用するのか楽しみなところです。

### 2. 略歴

- 1994 京都府生まれ
- 2016 富山大学芸術文化学部 卒業
- 2018 富山大学大学院芸術文化学研究科 修了
- 2018-2022 京都市立銅駝美術工芸高等学校  
(現 京都市立美術工芸高等学校)  
漆芸専攻 非常勤講師
- 2023 富山大学学術研究部芸術文化系 助教

### 3. 制作について

紙に漆を塗る「紙胎」(したい・かみたい) 技法を主に用いて作品制作を行っています。紙を様々に加工、成形し、漆と組み合わせる面白表現ができないかと探求しています。これは学生の頃から継続して取り組んでいることで、まだまだ発展の余地がありそうなので、しばらくは続けることでしょうか。作品の制作方法については まずはかたちのシルエットを大量に描き、そこから選別して 3DCAD を使い立体にモデリング、ペーパークラフトの要領で形を組み立て、そこに漆を塗っていくという方法を主に使っています。

過去には動物・生き物をモチーフに大きな立体作品を制作していたこともありますが、(写真1・写真2) 近年は専ら生活工芸・用途のあるモノを中心に制作活動をしています。(写真3) かつては人々の暮らしにもう少し近かった漆工芸。使えば使うほどその魅力に取りつかれてしまいます。この魅力をたくさんの人に知ってもらいたいという気持ちから始めたのが日用食器の制作です。しかし制作・発表を繰り返していくうちに世の中の漆工芸の認知度、理解度の低さに些かの絶望を覚えたのも事実です。現代においては、我々の

ように漆工芸を大学で学ぶ機会があった人や、身近に工芸作家がいる人でないと、なかなか漆工芸品を目にし、触り、実際に使う経験は得ることがないのかもしれない。正月に漆の器でお雑煮を食べることも減ってきているのではないのでしょうか。これは非常に寂しいことです。

それではどうやってこの漆の面白さ、魅力を今を生きる人たちに伝えるのか、届かないところへどうやって見せていくか。これについて日々思考を巡らせているわけですが、ここ最近の取り組みとしては「あえて作品を漆工芸のモノとして見せない」ことを試しています。私の作品はいわゆる漆工芸特有のピカピカの艶感や、蒔絵・螺鈿といった加飾はありません。下地のざらざらした手触りや和紙の繊維感を生かして、あえて言うなら「漆工芸らしくない」ものづくりとがほとんどです。私の狙いとしては、いろんなことを単純に、かなり端折って言うところ「漆ってこんな表情も出せるんだよ。」というところでしょうか。

また展示の方法にしても試行錯誤をしているところです。自分の作品と他者の作品を同じ空間に、混ぜるように並べることで、漆器であるという要素をあえて隠し、シンプルに「モノ」として興味を持ってもらうような仕掛けを試しています。(写真4) 目指すところとして、「漆だから欲しい、良い。」ではなく、「なんかよくわからないけれど良いよね、あ、漆なんだね。漆って面白いね。」というところなんだと思います。それが自分にとっては非常に心地よい漆工芸との向き合い方だと感じています。すこし肩の力を抜いているというか。

今の社会の価値観やスピード感とギャップがある分野ではあると思いますが、漆工芸が現代社会においてどのように人と関わっていきけるのか、悩みながらも楽しみながら制作・発表を試しているところです。人々の生活に寄り添う漆工芸を目指して様々に挑戦を続けていきたいと思っています。



写真 1 紙胎椰子蟹立像 阿 (2018)



写真 2 紙胎椰子蟹立像 咩 (2018)



写真 3 Shape (2020)



写真 4 小泉 巧 / 内藤 紫帆 nuance (2022) / Photo by TAKUMI KOIZUMI